

### 3. 東別府駅界限

#### 東別府駅～東町～東中町

東別府駅は浜脇駅として1911年(明治44年)11月1日に開業したそう。それから今日まで、駅名が変わったが、部分的な改修はあるものの駅舎は当時の姿を残して、今では大分県下で最も古い駅舎となっている。別府駅が同じ年の7月16日開業で、大分駅

が浜脇駅と同じ日に、鉄道院豊州本線(現在に日豊本線)の終着駅として開業している。

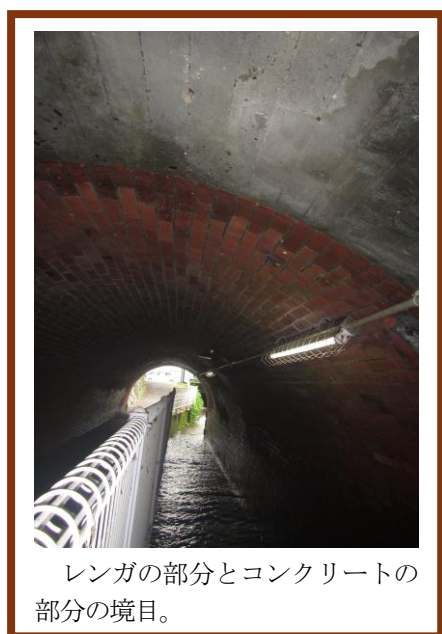
わたしが小さかった頃は、まだ跨線橋などはなく、二番ホームに行くには改札口を出た正面の階段を下りて、線路上に出、踏切のように向う側に渡ってまた階段を上ってホームに出たものだ。列車が入ってくる時は、危険防止のために階段部分に鉄製のふたがかけられていた。その名残は今も幽かに残っている。

駅を出て、これもわたしが子どもの

時のまま変わらぬ石段を下りて右に行くと、山家地区への近道と書かれた石塔が立っている。そこをさらに右に曲がるとおそらくは駅開業の時にできたのであろう歩行者専用のトンネルがある。向かって左側は金毘羅山の南麓を源流とする浜田川の排水路に

なっていて、豪雨の時などは歩道部分まで増水して危険になる。明治末年の建設とあって、小さな可愛いトンネルで、一番高いところでも地面から1.8mしかなく、わたしなどは背をかがめなくてはならない。ここが

通れない時のために、駅の北西側、別府駅側に踏切があるし、両郡橋の方に少し行くと、車の通れるガードもあ



レンガの部分とコンクリートの部分の境目。



奥にレンガ造りのレトロなトンネルが見えている。



山側（山家地区）側からはこんな感じ。

るが、わたしには子どもの頃か親しんできた、このトンネルを頭をぶつけないように屈みながら歩くのが好きだ。

もう一つ面白いのは、このトンネル海側から見るとレンガ造りのレトロな雰囲気醸しているのだが、山側から見るとコンクリート造りとなっている。トンネルの海側から約三分の一位のところで、レンガとコンクリートの境目がある。わたしの知らない相当昔に、列車の離合スペースをつくるために延長したのだろう。それで想像するのは、このトンネルは掘って作った

のではなさそうだ。山家の地形からしても、もともと浜田川が流れていて、そこを渡るために作ったアーチ式の橋で、それがトンネルのように思われてきたのだろう。

石段を下りて左を見ると、東町温泉が見える。昔はこの辺りが東町、東町温泉の向うが東中町という町名だったが、今では浜脇一丁目という味気ない町名になってしまった。ところで駅の石段を下りたところは、実は旧国道10号線。現在の10号線は少し海側になっているが、京都に次いでできた日本で二番目の路面電車の線路になっていて、東別府駅がその終点だったそうだが、わたしが物心ついた頃には、電車も大分まで延伸していたし、今よりは相当狭かったとはいえ別大国道も出来上がっていた。

東町温泉の下の道を湯トピアの方に歩いていく



今でも現役の井戸。子どもの頃は高崎山や両郡橋の浜に遊びに行った帰りに、この井戸の水でのどを潤したものです。子どもの頃は気が付かなかったけど、井戸の傍に弘法大師のお堂があり、そこには弘化四年と刻まれているところから、この井戸もその年頃に掘られたようだ。



別府八湯といっても昔ほどの個性は無くなっているが、それでも別府では下が共同風呂で上が地区の自治公民館というのは、全国的には珍しいのではないだろうか

と、少し先に井戸がある。昔からの井戸で、今は手押しポンプは取り外されているが、昔は手押しポンプでのどを潤したものだ。近所のおばちゃんた

ちはここで洗濯をしながら、おしゃべりを楽しんでした。浅い井戸であまり冷たくはなかったが、乾いた喉にはやはり美味かったことを60年以上も経った今でも忘れない。